

プロジェクト名：制作学的視点に基づく新たな美術教科内容学の構築

プロジェクト代表者：小澤 基弘（教育学部・教授）

1 研究の目的

教員養成系大学・学部における美術教科専門教育（実技）は、従来「絵画」「彫刻」「デザイン」「工芸」という4つの柱から縦割りの構成され現在に至っている。しかし、昨今の美術表現は、従来型のこうした分類には当てはめることができない新しい表現のあり方を主軸として展開されている。そのような現実を鑑みた場合、上記4つの教科専門の分類に基づいた大学における美術（実技）教育は、アナクロ的存在と化していると言わざるを得ない。本研究は、現在の美術表現に照らしつつ、教員養成系大学・学部の美術（実技）教育内容を検討しなおし、美術表現の現在性を踏まえた新たな枠組みの教科内容学（実技）の構築を旨とするものである。

そのためには、従来のような表現手法や素材から表現を考えるのではなく、〈創造性〉とはいかなるものかという表現の原点に立ち戻り、制作という行為自体をまず学的体系として明示する必要がある。それを筆者は〈制作学〉と命名し、その概念の主軸を創造者の〈主体的反省〉のあり方として捉え、反省の方法論を想定し提案する。つまり、〈作品〉という‘結果’のみで創造をみるのではなく、作品が生み出されつつある過程の諸段階を常に自覚的に捉えそれを反省するという‘プロセス’から創造を捉えるということである。その結果、例えば絵画と彫刻表現を統べる教育内容が浮上する等、様々な新しい内容学の可能性が現れ出ると考える。

2 研究の進め方

まず〈反省〉という心的行為のもつ意味についての考察から始めた。西洋哲学の文脈の中では、「反省哲学」というジャンルが存する。近年におけるフランスの哲学者ジャン・ナペールによる反省の創造的意義についての考察は、本研究の「反省と創造性との相関」を明示するための極めて有意義な研究であると考えられる。またそれは、今後望まれる美術教科内容学の軸として、いかにして学生が主体的に自身の創造行為を反省するか、その方法論確立に対する極めて重要な理論的根拠足り得るものであると判断された。

こうした理論的ベースを前提としながら、創造的反省の方法論を具体的な授業実践の中から見出すとした。研究代表者小澤が学部3年生で行っている実技科目「絵画応用実技Ⅰ」において、〈日々のドローイング〉を課題とした。それは受講生が毎日最低限一枚ドローイングを描き、一週間分のドローイング作品を授業時に教員（小澤）とともに振り返るというものである。それを半期4ヶ月間継続した。それはまさしく、創造のプロセスを学生がどのように反省するか、それを教員はどのような発話や対話のなかで促進させればよいのか、毎週検証できることとなる。学生にはその全てのドローイング（一人当たり百枚を超えるものが出来上がっている）を各自の工夫でファインリングさせ、半期を通して教員との対話の中でいかにして自分の創造性が開示されていくのかを、自らの言葉で反省させるレポートを課した。①日々のドローイング、②その記録ファイル、③毎回の教員との対話による主体的反省、④その蓄積、⑤振り返りの言葉によるレポート、この5つの方法によって、本研究を具体的に進めるための方法論とした。

3 研究の成果

毎回の教師との対話を通して学生が主体的に自己（自己作品）を反省する契機となり、教員の発する言葉やキーワードが、学生の創造性を喚起し、翌週のドローイング作品にダイレクトに反映することが、総じて明らかになった。特に大事な点は、作品を描きばなすのではなく、それをきちんと振り返ることができるような記録の方法を、学生各自が主体的に工夫し、それを継続的に実践することであることが、明らかとなった。また常にドローイングを描いている際には、思いついたアイデアやイメージについて、それを簡単でもいいから言葉に置き換えるトレーニングも同時に課したが、そうした言葉とイメージとの相関への気づきも、学生の創造性を促進し、それが作品へと反映されるという点も、同時に明らかとなった。美術教科における指導、特に絵画指導においては、感覚的で直感的な発話による指導、そして教員の美意識に片寄った指導が、多くを占めているのが現実である。それでは、学生各自のそれぞれの創造性を、それぞれの方向へ深く伸張させることは難しい。そうした現実を少しでも打開するために、本研究での方法論及びそれによる成果は、今後の教員養成系大学の絵画指導において、一つの重要な指針となり得ると考える。

4 今後の研究の展望

本研究では、創造プロセスを主体的に反省し、それを創造性の伸張につなげる方法論を探った。前述の5つのポイントに基づいてそれを行ったわけであるが、重要なプロセスが抜け落ちていることに気づいた。それは教員と学生との対話の記録である。対話は常に消滅していくものであり、録音という方法を取らなければ残されることはない。確かに対話を通して学生の心に言葉が刻まれ、それが創造性を触発することは明確であり、記録されなくともそれは起動するものである。ただ、研究ということになると、やはり対話のドキュメンテーション化はやはり不可欠であることに改めて気づいた。従って、平成22年度においては、本研究を継続して「絵画応用実技Ⅰ」において行うと同時に、毎回の全学生との対話記録を、音声認識ソフトを行使しつつ、ドキュメンテーション化していきたいと考えている。対話がドキュメント化されれば、対話のなかのどのような発話やワードが具体的に学生にどのような刺激を与え、創造性が助長されたのか、より具体的に分析することが可能となる。また教員自身に対しても、自分がどのような言葉がけを行ったのか、そしてどの言葉がけがどのように学生の主体的かつ創造的反省を喚起したのか、その相関が明らかとなるであろう。この観点に立って、平成22年度は改めて研究プロジェクト経費を申請しており、その研究費を頼りに、充実したドキュメンテーション作りに努めたいと考えている。